「お／ご～おき系列の表現について」

井上直美（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

「ご承知おき頂きたい」、「お含みおき願います」、「お見知りおきを」などの「お／ご～おき系列の表現」は、日本語教育の教材類に詳しい解説がなされていない表現である。本研究は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を用いてこの表現の実例を分析し、その特徴を記述することを目的とする。分析の結果得られた「お／ご～おき…」の特徴は、①注意喚起や配慮求めの場面で、話し手が聞き手に対し“情報を維持すること”を求める際の表現であること、②データに現れた共起語は 9 種と少なく、生産性の低い表現であること、③出現した共起語は「思考・認知・記憶」に関わるものに偏っており、現代日本語の「V ておく」、「V おく」とは違うふるまいを見せることの 3 点である。また、出現数が最多の形式は「ご承知おき下さい」であったが、これと「ご承知下さい」の実例を比較考察することにより、“おき”の有無による意味の違いについても検討した。

句に下接する「くさい」について
―アンケート調査に基づいた「ぽい」との比較を通して―

大上紗弥（埼玉大学教養学部日本文化専攻）

「くさい」は通常、形容詞や接尾辞として用いられるが、近年では句に接続する用法が出現・増加している。本稿では、「ぽい」と比較しつつ「句接続のくさい」の意味拡張、許容度、前接する要素の性質、使用実態などをアンケート調査の結果を基に論じる。まず、回答者による句接続の例文評価から、句接続用法の「くさい」「ぽい」ともに二重推量での使用には違和感があること、年齢層が上がるにつれて許容度が低くなることの二点を示す。次に、前接する要素について、「ぽい」は左右されないが、「くさい」はその要素がプラスの意味を持つ場合に不自然さが増すということを指摘する。句接続の用法に関して、「ぽい」は使用する人や場面が適していれば許容されるが、「くさい」は間違った日本語として捉えられていることが確認できる。最後に接尾辞の助動詞化という面で体系的に整理し、「ぽい」は助動詞として定着する手前である一方、「くさい」は年代により許容度に偏りがある未定着の用法であると結論づける。

コスタリカ人日本語学習者の言語学習ビリーフについて

松本匡史（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

本稿では、コスタリカ人日本語学習者を対象に言語学習ビリーフ調査を行なった。調査の目的は、コスタリカ人日本語学習者の特徴を把握することにより、コスタリカでの日本語教育を発展・改善するためである。本調査結果を、メキシコを対象とした先行研究結果と比べることにより、コスタリカ人のビリーフを把握する。それに加え、コスタリカ人学習者を「高等教育機関」と「その他の学習機関」の 2 グループに分け、t 検定を用い比較した。その結果。全 51 項目中 9 項目で有意差が確認された。

過去推量形「～タロウ」と「～タダロウ」の使用実態
—BCCWJ の文学作品を資料として—

李兮然（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

本稿は、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）に収録されている文学作品を調査資料として過去推量形である「～タロウ」と「～タダロウ」の使用実態を分析するものである。結果として、まず、前接する語の品詞に関して、動詞や補助動詞が前接する動詞型の場合、「～タダロウ」の使用が好まれるのに対し、名詞を代表とする名詞型の場合、「～タロウ」の使用が好まれる傾向が見られた。また、過去推量形の意味的用法と、会話か地の文かとの間に相互関係があり、「推量」と「不定推量」は「地の文」に多く現れ、「確認要求」は「会話」に多く現れることが確認できた。最後に、経年変化について、1940 年代以降、「～タダロウ」の使用数が「～タロウ」を上回るものの、「～タロウ」もまだ使われ続けている等の特徴を明らかにした。